

御土あはれこね

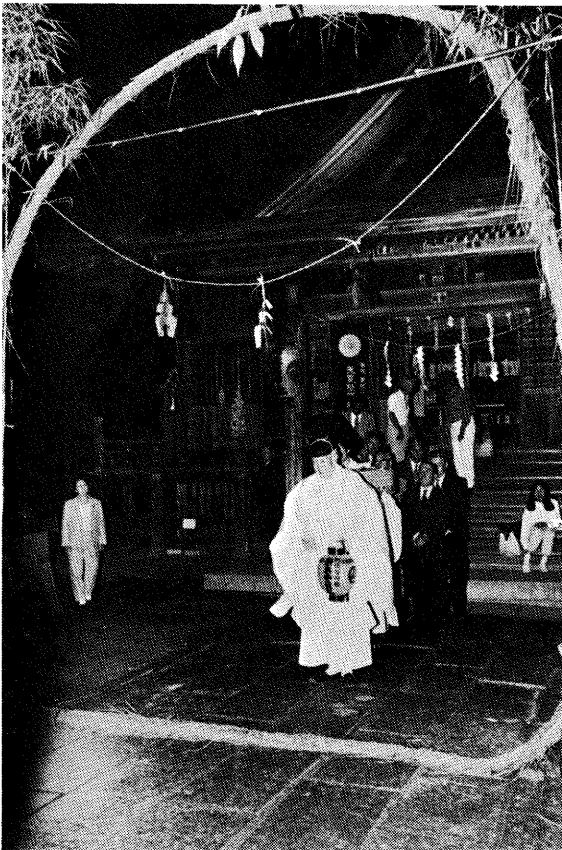
郷土館だより
第30号

五日市町立
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425・96・4069

五日市の年中行事 その1

— 大正末期～昭和初期 —

ふるさとを学ぶ会



阿伎留神社水無月祓茅輪くぐり (西の風提供) H2

はじめに

年中行事は大別すると、①宗教関係 祖霊崇拝を中心とする民間信仰と、仏教行事に根拠をもつもの、②生産関係 農作業の季節性や共同性に根ざすもの、③人生儀礼 とくに子供の成長に関するものなどからなる。

行事のねらいは災を避け、福を招くことであるが、飲

食をとまなうことが多く、慰安や社交を兼ねる。まゆ玉はよい繭がとれますようにと飾る。節分の豆まきは文字通り福を招き、鬼(禍)を払う行事だが、めざしの頭を焼き、ひいらぎと一緒に門口にさすのは農業にも関係のある虫よけ行事である。山仕事の多い山村では、作業の安全を願って山の神を祀る。商店では商売繁盛を祈って恵比須講を大事な行事とする。ひな祭りや鯉のぼりは我児の成長を祝い家門の繁栄を願う行事である。それぞれの行事はみな何かの意味合いがあって行われ、昔の単調な生活に潤いと味つけの役を演じてきた。この年中行事をよくみると、一年を二分し、同一の行事を前期後期に配している。例えば1月～6月、7月～12月はそのまま折り重ねることが可能である。正月とお盆は生活の出発に備え、一定の休養をとり、祖霊を手厚く祀る行事を行っている。一方6月末の水無月祓は前期のしめくくりで、12月の大祓が後期のしめくくりとして対応している。

年中行事が近年急激に廃れてきたのは、それなりの理由があり、時勢の赴くところであるが、伝統民俗の消滅を手を拱いていないで、せめてそれらの行事が、かなりかなり保持されていた大正～昭和初期の実態を聴取りによって書留めておこうと企画した。調査は郷土館で民俗調査の勉強をつづけてきた「ふるさとを学ぶ会」(大場智子代表、藤堂佐智子、秋山裕子、谷合益子、清水永子の諸氏)が担当した。五日市各地区ごとに、主に80代、70代のお年寄りを選んで個別訪問による聴取りを行った。1年半程の歳月をかけ、20戸の記録が溜ったところで会員の谷合益子氏が集約し成文化した。一口に五日市といっても周辺の山村、農村部に古いしきたりが量も種類も多く保たれていた。なお、この報告は前半期を30号、後半期を31号に分割して掲載する。

最後の『お年寄75人に聞きました』は大場智子氏のお

世話で「五日市のシルバー・コーラス会員」にアンケート用紙をまわした集計である。回答者は全員女性で、年齢は明治生れ8名、大正52名、昭和10名、不明5名。結婚前の住所は五日市及びその周辺が過半を占めるが、他県の方も若干含まれている。従って回答には他郷の思い出が混っている可能性がある。しかし、この集計数字は本文と照合してみると、その記事と一致し、裏付けの有力な資料となっている。(石井)

1. 正月の準備

○すすはらい

昔はイロリで火を燃やしたので、たいへんな量のススがたまり「すすはらい」は正月を迎えるための準備としてかかせない仕事であった。

すすはらいをする日を冬至に決めている家(留原K家 養沢T家)とか26日に決めているという家もあったが、だいたいの家は20日以降の天気の良い日に行った。掃除の道具は青竹青笹で作った長い柄の箒木を用いた。竹林のある家では竹を切ってきて自分で作り、竹のない家では近所で分けてもらったり、あるいは不要になった箒木をもらって使った。そして使用後は焚き上げたり山などに置いて自然にくさらせるなどした。

留原のK家では、すすはらいが終ると神棚へ小豆ごはんや時によるとボタモチなどを上げたそうである。

○餅つき

正月を迎える準備の中で餅つきは特に重要な仕事である。暮の25日から30日にかけてどこの家でも餅つきをした。29日はクモチ(苦餅) 31日はイチヤモチ(一夜餅) といって餅をつくことを忌んだので28日頃につく家が多かった。中には29日をいやがらない山田のY家とか、28日に火事で家が焼けたことがあり、以後この日は火を使わないために29日についたという戸倉のA家などもあったがこれらは特殊な例であろう。

○お供え(おすわり)

お供えの数や供える場所は家によってさまざまであるが、調査したところでは数は3すわり~14すわりまであり、最も多いのは5すわりであった。供える場所は大神宮様、仏様、恵比須様、荒神様まではどこの家もほぼ共通であった。あとは床の間、稻荷様、蔵神様、水神様、山神様、庚申様、五輪様、天神様、金比羅様、地藏様、産土様、ほうそう神様、とぼ口(玄関) 便所、仕事場等その家のしきたりや仕事によっていろいろである。年神

様に供えるところもあったが、これは卯の日までで、例えば元日が卯の日に当たれば一日で下げるわけである。

(戸倉A家 養沢T家) また留原のK家では辻にも供えるという。

○おかまじめ

神の依代として神前に供えるしめ縄と幣束のことで、幣束は四手(紙垂)に切った紙をしの竹にはさんだものである。正月が近づいてくるとあらかじめ神主さんに頼んでおいて、もらいに行くか、あるいは何軒かまとめて当番が受けとってくるという家が多かった。養沢のY家では神主さんのところへ行く日が冬至と決まっているという。戸倉のA家、乙津のO家、養沢のT家等では神主さんが家に来て作ったという。この場合は神主さんが御幣を作って灯明をあげ大祓の祝詞をあげる。そして神主さんには小豆ごはんは尾頭付などでご馳走をしたそうである。しめ縄は手作りする家もかなりあった。(伊奈N家 戸倉T家等)

御幣の種類や本数はお供え餅と同様に家によってまちまちであり9本~21本までであった。供える場所は神棚、荒神様、水神様等で家によっては蔵神様や山の神様もあった。また年神様に上げた幣束は初卯の日に下げて近くの神社に納めた。(小庄U家) 子どもたちも年神様がいらっしゃる間は静かにするようにいわれたので、年神様が早くお立ちになればよいと話しあったという。

幣束の中に1本お祓い用のものがあり、これは家の中から貧乏神や悪病神を追い出すという意味で家中を祓い、あとは辻にさしたり、家の入口などにさしておき、葬式から帰った時などでこれで清めた。(養沢Y家M家)

おかまじめの飾り付けは31日は一夜飾りといってきらい、ほとんどの家が30日に行ったが養沢地区では31日に飾る家が多かった。

○年棚

年の神、すなわち正月の神を迎えるためにその年の恵方に向けて作る棚であるが、調査した範囲では作る家は少なかった。乙津のO家では大神宮様のとなりへ机をさかさにして棚を作り、左右に松を飾り、大根の輪切りに幣束をさして供えたそうである。

○大晦日

大晦日のすごし方はその土地や家によって異なるが、人それぞれに一年をふりかえって、あるいは来る年の期待等いろいろな思いをこめて過ごすのだろうが、聞き書きの中からいくつかあげてみたいと思う。

●風神様(おはらい)を米俵のフタ(さんだわら)にさ

し辻（十字路）において後をふりむかないで帰る。（山田Y家五日市M家）●イロリでナスとキクのからを燃やす、借金なすがら、良いこときくがら。（山田Y家）

●神棚に上げる器をみがく。（五日市M家）●神棚に酒を上げる。これは御神酒として元日に皆でいただく。（留原K家）●一夜飾りをきらわない家ではしめ飾りをする。（山田Y家養沢Y家他）●年越そばを食べる。●一年中の体内の砂を払うということで「こんにゃく」を食べる。（伊奈N家山田Y家留原K家）●使用人のいる家ではおしる粉や甘酒をふるまった。（五日市M家）

2. 正月の暮し（1月の行事）

○年男

正月の三カ日は年男が朝早く起きて若水を汲み、この水で雑煮を作ったり湯をわかして福茶を飲んだり風呂をわかしたりする。年男はその家の戸主がする場合が多いが、長男がすることもあり商店などでは使用人がすることもある。

商家である五日市I家では小僧さん2人が年男となり午前2時に起きて若水を汲み、一番先に風呂に入り身を清めてから雑煮を作った。これは三カ日続いた。またこの場合年男には一番先にお年玉をあげたそうである。

山田のY家の年男は三カ日の朝だけ、山田M家では三カ日神棚にお酒を上げるだけとのこと。また乙津O家小庄U家の年男は年神様の居られる間だけ食事の仕度等をしたそうである。年神様のいらっしゃる間とは卯の日の卯の刻（午前5時～7時）までであり、たとえば元日が卯の日に当る場合は年男の役目は元日で終るわけである。

戸倉のA家では汲んだ若水は豆がらを燃やしてわかった。山田のY家でも三カ日は豆がらを燃やしたそうだが今年もマメにすごせるようにという願いをこめていたのであろう。

○雑煮

五日市では、殆どの家がお正月三カ日はお雑煮を食べた。雑煮の材料は里芋・大根・人参・葉っぱ等自宅とれる野菜を入れて作ったすまし汁に焼いた餅を入れたもの、中にはとり肉を入れたという家もあったが（小庄U家）この場合神様へ上げる分にはとり肉は入れないそうである。留原K家のように里芋と大根だけのすまし汁に餅を入れたいわゆる「いもずいもの」とよばれる雑煮がもっとも素朴な雑煮であるが、年とともに中身も多彩になっていったようである。

○元日のすごし方

当時の人たちは元日をどんなふうにすごしたのであろうか、この辺でいくつか書き出してみたいと思う。

●神社の庭に集って火を燃やし、新年の挨拶をする。（戸倉A氏）●氏神様へ詣る。●恵方まいりといって近くの神社等へ詣る。●朝4時に菩提寺である大光寺で護摩を焚く。（留原K氏）●大人は朝から風呂に入り一日中酒のみをする。（養沢T氏）●子どもは凧あげや、羽根つき等をする。●風邪を引かないように三カ日中一日に一度はとろいもを食べる。（Y家U家M家）

○七草粥（1月7日）

1月7日はだいたいの家で七草粥を作って食べた。せり・なずな・ごぎょう・はこべら・ほとけのざ・すずな・すずしろの春の七草をマナ板にのせ「七草なずな唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬ先にストンストン」あるいは「……渡らぬうちになずなをたたいてせりただけ」と唱えながらきざみ、これを入れて粥を作って食べた。が実際には七草はそろわないので、せり・なずな・大根など手に入るもの3～5種、または自宅とれた野菜などで7種にして粥をつくった。

また七草は爪を切る日にもなっていた。元日から七草までは爪を切ることを禁じ、この日七草をつけておいた水に爪をひたし、初めて爪を切るのだという。（留原K家）こうしておくといつ爪を切ってもよいというわけである。

○蔵開きと鍛開き（うないかけ）（1月11日）

1月11日にお供え餅を下げ、蔵のある家では蔵の扉を開くクラピラキと、田畑のある家では鍛入れの儀式をする。下げたお供えはくたいておしる粉にしたという家が一番多く、雑煮、あられ、水餅などにする家もあった。戸倉A家ではお供えを下げる日がそれぞれに決まっていた。11日にはじまり、仏様に供えたのは16日、山の神様は17日、天神様は25日という具合であった。

山田のY家伊奈のN家などではこの日に「うないかけ」といって畑に初めて鍛を入れた。作物がよくできるようにと恵方（正月の神の来臨する方角でその年によってちがう）に行き1本の、篠ン棒につけた幣束を立て、鍛をちょっと入れておさんご（お洗米）とくたいたお供え餅を土に埋めるのだそうである。

○小正月（13日～16日）

13日は米の粉でまゆ玉を作って、つげの枝にさし、（つげがない時は梅の枝）これを石臼の穴にさして飾る。大きいまゆ玉も16個作り（蛭が2匹入る玉まゆ、留原K家）またお金がなるように小さなミカンや、絹糸に見立てた



まゆ玉飾り 田島 寿氏『秋川谷の風物詩』より

麻も枝にかけた。(戸倉A家留原K家)10日の五日市のダルマ市で買ったダルマを飾る家も多かった。こうして飾ったまゆ玉は16日にマユカキといってまゆ玉をさげ、ふかし直したり(養沢Y家)焼いたりして食べたが、しょう油は「しみまゆ」ができるからいけないといって使わず砂糖をつけて食べた。(五日市N家)まゆ玉の豊作を願う行事であるが蚕を飼わない家でもまゆ玉は作ったようである。

15日の朝はほとんどの家で小豆粥をつくって食べた。乙津のO家では小豆ごはんを炊き、床の間に明治天皇の掛軸をかけお酒を供えた。

○やぶ入り(1月16日)

奉公人とお嫁さんが休みをもらって里に帰れる日、店の小僧さん達は三日間位の休みをもらって実家に帰った。(五日市I家)また女の正月といい嫁さんは里帰りにダンゴを作って持っていった。(戸倉A家)

この日に殆どどの家が墓参りをしているがこれは五日市の特徴であろうか。

○山の神(1月17日)

山仕事を休んで男たちがお日待ちをする。旧五日市地区では少ないが、当時山仕事に従事する人が多かった戸倉及び養沢地区では現在も行われている行事である。

年番と当番が昼頃から準備して餅をつき、酒盛りをした。(養沢T氏)

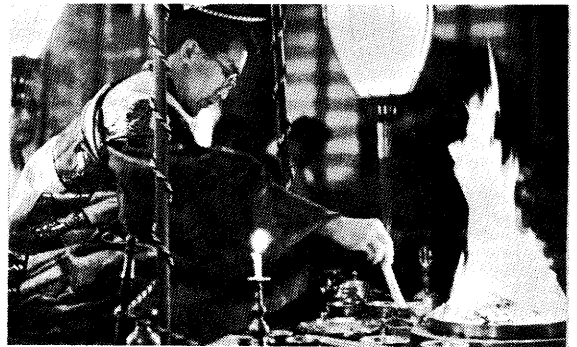
○恵比須講(1月20日)

恵比須様は漁業商業の守護神であるので、恵比須講は商家で商売繁盛を祝って恵比須様を祭る行事であるが、調査した範囲では、商家でなくても殆どどの家が行っていた。正月は恵比須様が働きにお出かけになるといって朝お祝いをする。普段は高い所や勝手にしまつてある恵比

須様を出して床の間などに飾り、いろいろ供え物をする。まずお金であるがマスに入れて供える。(戸倉A家)家中のお金を全部集めて倍になるように供えた。(五日市M家)がま口をあけてこれを一杯にしてくれといて供えた。(養沢T家)またお金がたまるように貯金通帳や硬貨をあげたという五日市のSさん(84才)はおじいさんが50銭硬貨が300円以上も入った財布を供えたが中をのぞくとカビの粉が、ほだつたのを覚えているという。その他は山盛りにした小豆ご飯、酒、尾頭付、大きく切って煮た野菜の煮付、トーフのすまし汁(けんちん汁も2軒あった)等で、供え物は五日市全地域でほぼ同じであった。ただし戸倉のA家では朝は里芋の煮たのを、また留原のK家では八ッ頭を大きく切って味噌煮にしたものを供えたそうである。

3. 2月～6月の行事

○節分と豆まき(2月3日か4日頃)



▲護摩たき ▼豆まき 大悲願寺 S61



節分は冬から春に移りかわる時で立春の前日をいう。この日に鬼打豆といって炒った大豆をまく習慣があるがこの行事は実行率が高く現在も続けている家が多い。

ヤッカガシ(焼きかがし・焼いた匂いがかがせるの意)といってメザシの頭を焼いたのを豆ガラにさし「へびも

ムカデも口焼き申す」(U家)「獅子ムジナ・ヘビ・ムカデの口焼き申す」(T家)と唱えツバをベッベッベッと3回かけてからひいらぎの枝と共に入口にさしたそうである。炒った豆はその家の主人が「福は内福は内、鬼は外鬼は外、鬼の目ぶつつぶせ」といつてまいた。まく順序はまず家の中にまいてから氏神様へまくという家と、先に氏神様へまきに行き帰ってから家の中へまく家と二通りあった。豆まきが終るとマメに暮らせるようにと歳の数だけ豆を食べた。

○事八日(2月8日)

2月8日(事始)と12月8日(事納)に行われる行事で、聞き取りをした人のうちで知っていたのは三割程度であった。あまりなされていない行事といえる。

この日は一ツ目小僧がハンコを押しに来るので(判を押されると病気になる)それを封じるために次のようなことをした。●履物は家の中にしまう●「しぶぐみ」の枝を庭で燃やす(くさいにおいがする)●ザルを竹竿にさして庭に出しておく、ザルには目がたくさんあるのでその目でにらんで悪物を寄せつけない。●山仕事は休み山には絶対に入らない。(山田Y五日市U乙津O戸倉A留原K)

養沢地区ではフセギ(防・禦)といつて神主さんに幣束を2本作ってもらい、年番が部落の東西の境に立てる。悪い病気等が入ってくるのを防ぐためである。

○初午(2月初旬)

2月初めの午の日に稲荷様をまつる行事であるが聞き取りした約半数に屋敷神としてお稲荷様があった。また自分の家になくても近くの稲荷様へ旗をあげたり供え物をするという家もあり、かなり盛んに行われた行事である。

供えるものは五色旗・赤飯・酒・メザシ・油あげ・煮しめ等である。五色旗は青(緑)黄赤白紫(黒)の順に色紙をつなげて作ったものである。しかし乙津O家養沢T家では白が一番下にきてこの部分に「クジを切る」といつて縦四線横五線を書いた。そして旗の左側に年月日と奉納者の名前を○○氏と書いて奉納したそうである。

(註)クジを切るとは九字のまじないをすることで護身の秘呪として、臨兵闘者皆陣列在前の九つの文字を唱えながら指で空中に縦四線横五線を書いた。

○三月の節句(ひな祭り)(3月3日)

3月3日は女の節句でお雛様を飾り、餅をついて上げるがこれは現在も続けられている行事の一つである。お雛様は嫁入りして初節句に嫁の里から贈られる「贈り雛」や女の子の初節句にやはり親の里や親類などから贈られるもので、良い日をえらんで出し12日間飾るとい

家が多い。いつまでも出しておく娘が片付かないとか、火難にあうとかいわれた。餅は2月28日か3月1日頃につき、紅白青3色の餅を菱形に切って重ねたものが一般的だが中には白青2色の餅(留原K家)四角餅(戸倉H家)もあった。その他あられ・白酒・ハマグリ・赤飯・桃の花等である。戸倉のA家では柳の枝をあげたといつて「柳のかずら」といつて柳を髪飾りとし、3月の節句に用いたと広辞苑にある。

○春の彼岸(3月21日前後)

彼岸は春分秋分の日を中日として、前後7日間で殆ど家がボタモチを作り墓参りをする。「入りボタモチに明けダンゴ、中のちゅうにちゃ(中日)小豆めし(H家O家)」というようにご馳走を作って仏様の供養をした。また墓地の改修は彼岸にしたといつて。(戸倉A氏)

○花祭り(4月8日)

お釈迦様の降誕を祝つて寺で行うまつりである。灌佛会といつて、水盤にお釈迦様の像を安置し、参詣者に甘茶をかけてもらう。子どもたちも甘茶をもらいにいくのを楽しみにしていたようである。聞き取りの中で名前をあげられた寺は広徳寺・開光院・徳蔵寺・光厳寺・能満寺・玉泉寺などで五日市でもかなり行われていたようである。また各お寺では甘茶で墨をすり、虫封じの札を出した。札には「千早振る卯月8月は吉日よ、神さけの甲を成敗ぞする」とあった。(虫の字はさかさまに書いてある)戸倉のH家では光厳寺に行き、甘茶と魔よけの団子を家族の人数分だけもらってきたそうである。

○五月の節句(5月5日)

5月5日は男の子の節句である。初節句に嫁の里や親類から贈られた鯉のぼりを揚げ五月人形を飾った。この日は柏餅をつくったり赤飯をふかしたりした。しょうぶ湯に入るといふ家も多く、H家では女の子は「へびよけ」といつてへびにあわないようにと必ず入ったそうである。U家では悪いものが入らぬように屋根にしょうぶと、よもぎをさしたり、酒の中にしょうぶをきざんで入れた、「しょうぶ酒」を神様にあげ、家族も飲んで健康を祈ったといつて。

○水無月祓い(6月30日)

人形を作つて祝詞を上げ夏やせをしないように祈る。三嶋神社で茅の輪をくぐり体を清めた。(戸倉A氏)

人形とはお祓いの時の身代りに紙でつくったものである。茅の輪くぐりは、これで半年間の厄払いをするといつて行事であるが五日市の阿伎留神社では、この行事を江戸時代から脈々と今に伝えている。

4. お年寄75人に聞きました

— 数字が語る むかしの行事 %は実施率 —

- 餅つきの日 12月28日 **67%**
29日は苦餅といって避けた。
- お供え 1組～15組 平均**5組** 供える場所は神棚、仏壇、床の間、荒神、恵比須・大黒の順。稲荷、水神など屋敷神の多い家ではお供えの数が多い。
- おかまじめ 幣束は神主に注文 **68%**
しめ縄は手作りする者が多い。
- 年棚 **16%** この地方では年棚は少ない。
- すすはらい 日は不定が多く道具の竹は自家**40%**、近所でもらう**27%**、竹はドンド焼きの材料。
- 元旦から三ヵ日 年男がいる**45%**、雑煮を食べる**90%**、氏神詣**75%**、墓参り**33%**、雑煮を三ヵ日食べる**72%**、仕事を三ヵ日休む**52%**、雑煮の内容は、だいこん・さいも・にんじん・菜っば等自宅でとれる野菜が原則。鳥肉を入れた家もあった。
- 七草がゆ 1月7日 **66%** せりなど摘み自宅の野菜を混ぜて雑炊をつくる。七草を一応そろえた家**23%**。
- 蔵開き 1月11日 **68%** お供え餅をくたく日で、その餅は焼いて食べる**32%**、お汁粉をつくる**21%**。その他、雑煮にする、あられをつくる。
- 小正月 1月13日～16日 まゆ玉作り **66%** 米の粉のだんごを梅の枝**32%**にさし、その枝を石臼**27%**にさして飾る(梅はつげの代用)、ダルマも一緒に飾る**36%** このため1月10日の五日市のダルマ市でダルマを買った。



五日市町のダルマ市・下町 S31

○ドンド焼 1月13日 記憶がある**44%**



五日市のドンド焼き・小中野 S54

- やぶ入り 1月16日 奉公人と嫁が実家に帰る日。この日墓参り**73%** 高率である。
- 山の神 1月17日 山仕事を休み、男たちがお日待をする。記憶あり**20%**。
- 恵比須講 1月20日 **73%** 恵比須大黒を床の間に飾り供え物をする。供え物は、あずき飯(てんご盛) **59%**、魚**60%**、お金・財布**36%**。
- 節分 2月初め 豆まきは殆どの家で行ったようだがまき方に、家→氏神、氏神→家の2通りあった。メザシの頭を戸口にさす風習は**70%**の高率。
- 初午 2月初め 自家に稲荷がある**44%**、供えもの、油揚げ**45%**、赤飯・あずき飯**52%**、赤飯の方が多い。
- こと八日 2月8日 (魔よけ行事、本文参照) 記憶あり**9%**、下駄かくしを知っている**4%**。
- ひな祭り 3月3日 餅をつく**41%** 供えもの、菱餅**37%**、あられ**33%**、五目飯(ちらし寿司を含む)**24%**、白酒**11%**、蛤**11%**、桃の花など。
- 春の彼岸 3月21日頃 ぼたもちをつくる**84%**、五目飯**11%**、彼岸とぼたもちは切っても切れない。
- 花祭り 4月8日 甘茶もらい**63%** 子供同志で近所のお寺に行った。お寺では甘茶で墨をすり、虫よけの札を出した。札の記憶あり**30%**、この札を逆さに貼ると効能ありとのこと。
- 五月の節句 5月5日 五月人形を飾った**76%** 鯉のぼり**64%**、最近の鯉のぼりの減少は住宅事情、核家族化、幟を立てる人手がない等が考えられる。
- 水無月祓 6月30日 人形**55%** 茅輪くぐりの記憶少々。家族全員で神棚をおがむと答えた方があった、これは水無月祓の伝統の正統な継承派。(以下次号)